

3 父への想い

刑事としての多忙な日々が体に負担をかけていったのでしょうか、佐介は次第に病に侵されていきます。学生時代の歌を集めた手作り歌集には、民子が病気の父を詠んだ歌がいくつか収められています。

悪化する父の病状や懸命に看病する母の様子など、当時の菅野家の様子を民子は悲しみをこめて歌にしています。

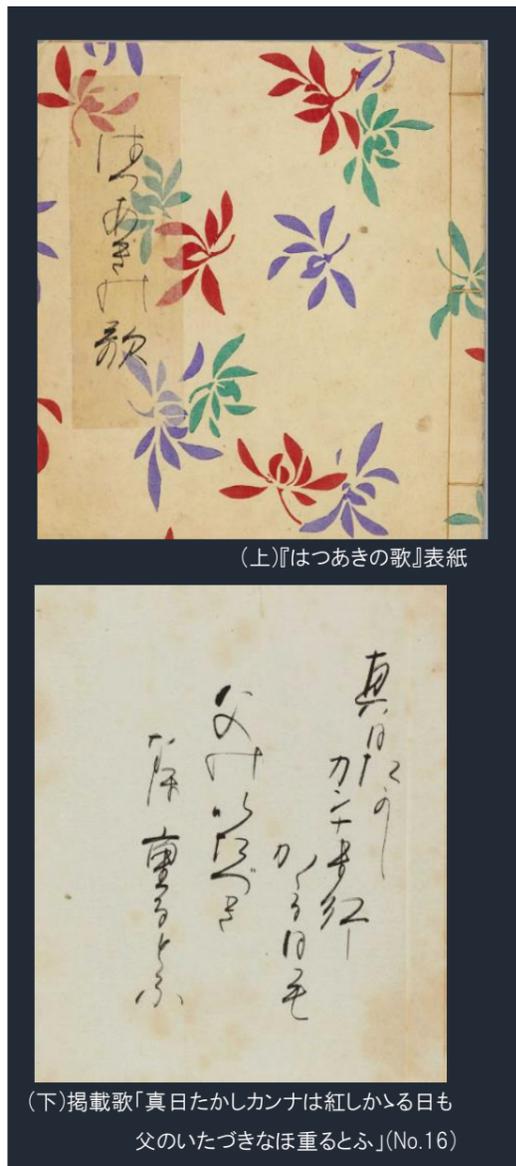
そして、娘の民子が夢を叶え、釜石市で教員になったのを見届けた佐介は、1945(昭和20)年1月に57歳で亡くなりました。当時、民子は20歳でした。

「おこなひを正して待てと教はりき
終戦を見ずに死にし父より」(No.18)

民子は在りし日の父を想い、父を懐かしむ歌を生涯に渡って詠みました。

「床飾りの鷹の目玉が光る日は
用心せよと言ふ父も亡し」(No.19)

「溪流の藻の匂ひして亡き父の
釣りくる鮎は今にさびしき」(No.20)



(上)『はつあきの歌』表紙
(下)掲載歌「真日たかしカンナは紅しかゝる日も父のいたづきなほ重るとふ」(No.16)

民子は、学生時代から教員時代(1941年～1948年頃)にかけて16冊の手作りの歌集を遺しました。『はつあきの歌』は1943(昭和18)年10月3日、民子が奈良女子高等師範学校3年生の時に作成した歌集です。

参考文献

- 『岩手年鑑 昭和8年』岩手日報社/編 岩手日報社出版部 1933年
- 『職員録 昭和13年7月1日現在』内閣印刷局/編 内閣印刷局 1938年
- 『岩手年鑑 昭和18年』新岩手日報社/編 岩手協同出版社 1943年
- 『大西民子集—現代短歌入門(自解100歌選)』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『評伝 大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年
- 『まぼろしは見えなかった—大西民子随筆集—』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逍空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2023年3月7日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



民子の父・菅野佐介

—亡き父のマントの裾にかくまはれ—

2023年3月7日(火)～5月4日(木)

No	種別	内容
1	自筆原稿	「昔の刑事」大西民子 筆 「短歌」1981年1月号 掲載
2	写真(複製)	父・佐介
3	自筆歌集	『浜のあけくれ』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「 ^{ひぐらし} 蝸のかななくこゑに暮れてゆく父のふるさと塩澤の村」
4	自筆原稿	「お守り札」大西民子 筆 「埼玉風景」1970年1月号 掲載
5	民子所有品	氷川神社お守り
6	自筆原稿	「亡き父のマントの ^{すそ} 裾にかくまはれ歩みきいつの雪の夜ならむ」
7	自筆原稿	「夜更かして語り尽きずシャーロック・ホームズと ^{うた} 謳はれつつ貧しかりし父の思ひ出」
8	書籍	『風水』大西民子 著 1986年刊行・初版 沖積舎 掲載歌「亡き父の懐中時計出でて来ぬ銀の鎖はいつしかあらず」
9	民子所有品	佐介、剣道段位取得証明書(1931年2段習得免許状)
10	自筆原稿	「果たし得ざりし学問を汝こそ遂げよとぞ言ひ遺せる父の忌はまためぐり来ぬ」
11	自筆原稿	「 ^{びでん} 美田は買はず」と言ひて遊学させくれし父を思ふ今宵の忌に帰り来て」
12	日記	受験生のころ～民子の日記より
13	自筆歌集	『寂天莫地』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「いつくしむはらからよ父よつがなくひと日の学び終へ吾は寝ねむとすなる」
14	自筆歌集	『春愁の曲 歌の集』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「いつくしむはらからよ父よ吉野路の旅夜切なく故郷恋へる子を」
15	自筆原稿	「G線を張り替へて弾くヴァイオリン誰が名器より ^{きよ} 冽き音たてよ」
16	自筆歌集	『はつあきの歌』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「真日たかしカンナは紅しかゝる日も父のいたづきなほ重るとふ」
17	自筆歌集	『歌集 びわの花』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「春を待ち疲れて ^つ 盡くるいのちあはれいまはの父に雪夜のしづけさ」
18	自筆原稿	「おこなひを正して待てと教はりき終戦を見ずに死にし父より」
19	書籍	『無数の耳』大西民子 著 1966年刊行・初版 短歌研究社 掲載歌「 ^{とこかざ} 床飾りの鷹の目玉が光る日は用心せよと言ふ父も亡し」
20	書籍	『光たばねて』大西民子 著 1998年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「 ^{けいりゅう} 溪流の藻の匂ひして亡き父の釣りくる鮎は今にさびしき」
21	自筆原稿	「繋温泉の思い出」大西民子 筆 「温泉」1979年7月号 掲載

1 みちのくのシャーロックホームズ



写真「父・佐介」(No.2)

民子の父・菅野佐介^{かんのさすけ}は、1888(明治21)年に福島県安達郡塩沢村^{ふくしまけんあだちぐんしおざわむら}で生まれました。民子の母となるカネと結婚し、夫婦は岩手県盛岡市に移り住みます。刑事となった佐介は数々の実績を残し、新聞で「みちのくのシャーロックホームズ」として特集される一方、剣道も警察の全国大会に出場するほどの腕前でした。

仕事熱心だった佐介は、年末年始も警護に駆り出されるほど多忙でしたが、正月休

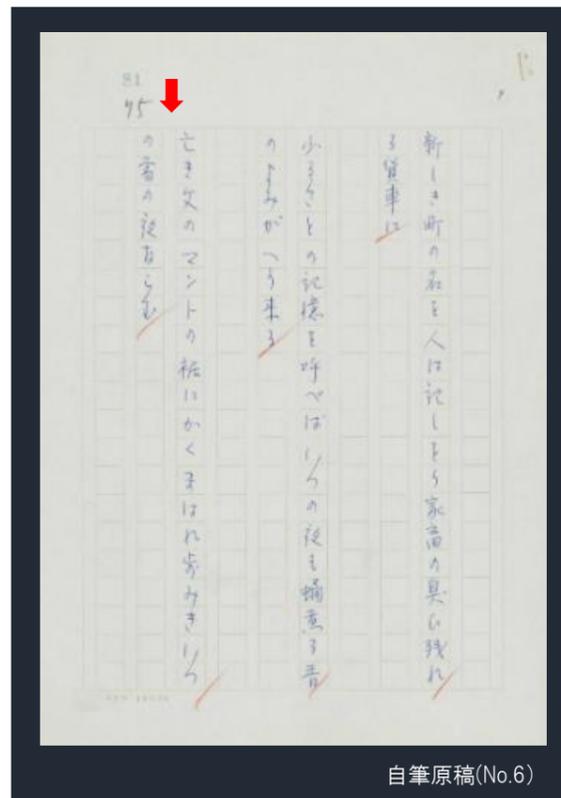
みが取れた時には可愛がっていた民子を連れ初詣に行っていました。やさしく強い父のことを尊敬していた民子は、晩年になっても「今でも、父のマントを着た姿、すぐに浮かんでくるのよ。」と語っています。

「夜更かして語り尽きずシャーロック・ホームズと

謳^{うた}はれつつ貧しかりし父の思ひ出」(No.7)

「亡き父のマントの裾^{すそ}にかくまはれ
歩みきいつの雪の夜ならむ」

刑事の父は、冬には制服の上に黒いマントを羽織っていました。民子は晩年、マントを翻^{ひるがえ}し歩く姿はかっこよかったと言っています。ある寒い冬の夜に父と出かけた民子は、広いマントにくるまれて歩きました。自分を守るように歩く父の、温かな愛情を懐かしく詠んでいます。



自筆原稿(No.6)

2 民子の進学

佐介は、当時の父親としては珍しく、女の子である民子の向学心に理解を示していました。水準の高い盛岡高等女学校に通っていた民子にとっても、志望した奈良女子高等師範学校は難関校でしたが、佐介は民子を応援し、受験の際にも東京の試験会場まで付き添いました。いよいよ試験が迫り、不安でいっぱいになった民子ですが、佐介の温かい励ましもあって無事に合格することができました。

また、進学後民子がヴァイオリンを習いたいと希望した際には、佐介は楽器購入のための費用を奈良へ送金しており、勉学以外でも娘が才能を伸ばすことを応援していました。



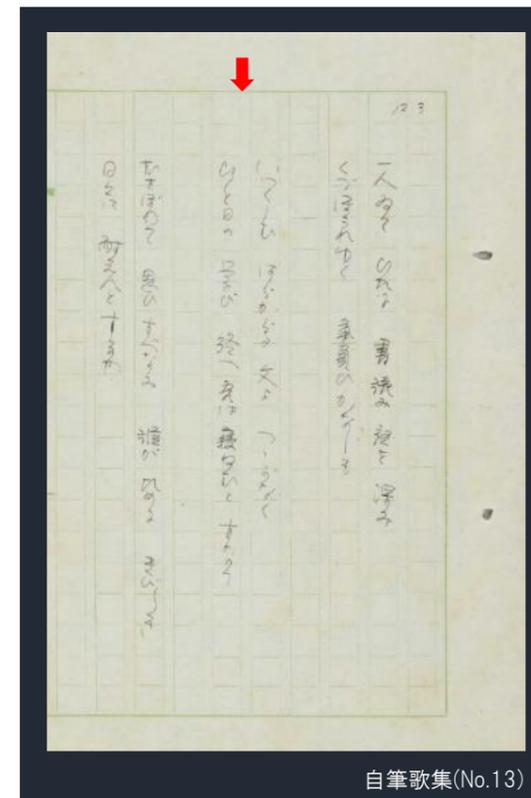
写真「盛岡高等女学校時代の民子」

「美田^{びでん}は買はず」と言ひて遊学させくれし

父を思ふ^{こよい}今宵の忌に帰り来て」(No.11)

「いつくしむはらからよ父よつゝがなく
ひと日の学び終へ吾は寝ねむとすなる」

歌の中で、民子は遠く離れた故郷で暮らす、はらから(兄弟姉妹のこと、ここでは民子の妹・佐代子)や尊敬する父に、今日の日が無事に終わったことを伝えています。この歌を作った当時、民子は奈良女子高等師範学校の寄宿舎で生活していました。



自筆歌集(No.13)